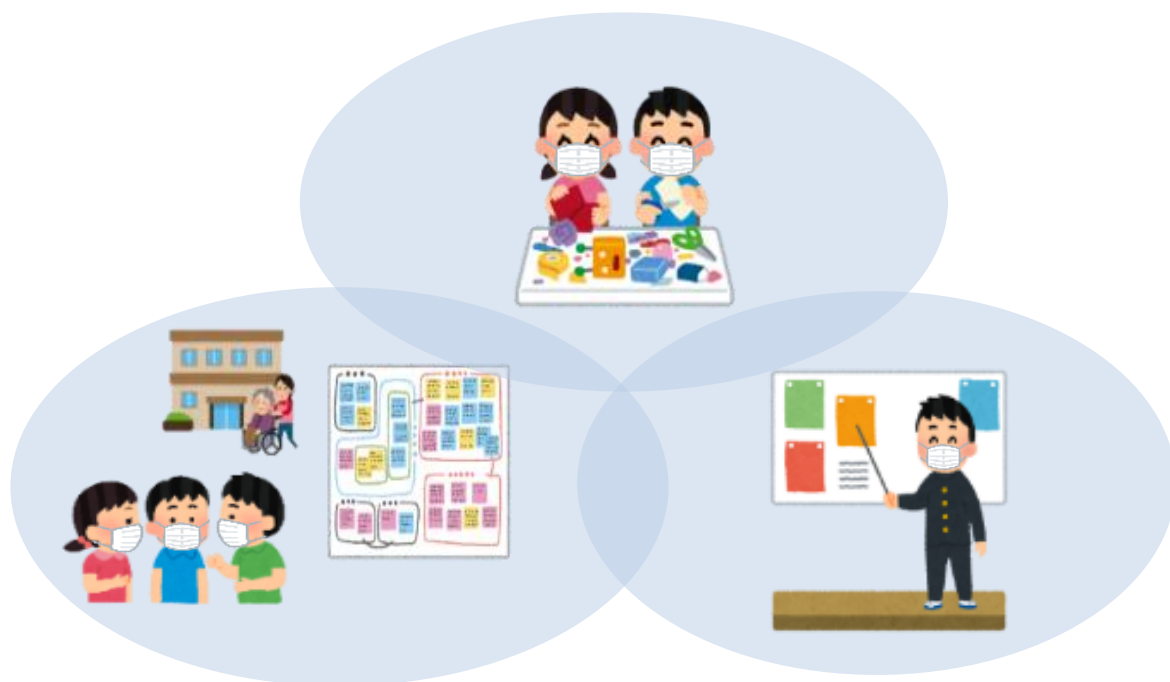


授業改善！知的障害特別支援学校 ～プロジェクト型学習の進め方～

実践事例集



この事例集は、令和3年度広島県立教育センター研究事業「知的障害特別支援学校におけるプロジェクト型学習に関する研究（2年次）」の成果物です。
知的障害特別支援学校においてプロジェクト型学習を実践する際の一助となることを目指して、特別支援学校小学部・中学部・高等部の実践事例を紹介しています。
また、広島県立教育センターのHP「特別支援教育の部屋」に、
「研究論文」及び「パンフレット」が掲載されています。
本実践事例集とともに御活用ください。
右横のQRコードから読み取ることができます。



特別支援教育の部屋



広島県立教育センター
マスコットキャラクター
「ラン」

令和4年3月
広島県立教育センター

実践事例集作成の経緯

広島県では、令和2年度から、教職経験者（6年目）研修及び広島県立教育センター特設講座等において、プロジェクト型学習に係る研修を実施しています。

これらの研修は、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校が混在した形態で、総合的な学習（探究）の時間についての単元づくりをすることが多いためか、特別支援学校籍の受講者の事後アンケートの記述欄に、右のような回答が複数ありました。

研修の事後アンケートより

- 今回学んだ内容を、知的障害のある児童（生徒）に実際に活用していく実例があると分かりやすい。
- （知的障害特別支援学校の小学部には、総合的な学習の時間が教育課程にないため）現実的に明日から使えるという引き出しにつなげにくかった。

そこで…



何とかしなければ！

知的障害特別支援学校の先生方に協力してもらい、**具体的な実践事例を示す**ことにしました。



次の3校の先生方に協力していただきました。

尾道特別支援学校 しまなみ分校小学部 第1学年『遊びの指導』

担当する児童が学習の主体となっている姿をイメージできませんでしたが、プロジェクト型学習を進めていく中で、主体的に学ぼうとする児童の姿が見られたことに驚き、嬉しく思いました。



庄原特別支援学校 中学部第2学年 『総合的な学習の時間』

研究開始前は、プロジェクト型学習という言葉は聞いたことはありませんでしたが、内容は知りませんでした。そのため、不安な気持ちでした。しかし、実際に挑戦すると、生徒及び教師が大きく成長することができました。



広島北特別支援学校 高等部（第2, 3学年） 『作業学習』

プロジェクト型学習を、これまで実施したことがないので、最初は不安もありました。実際にやってみると、教師間でゴールイメージなどの共有がしやすく、TTがスムーズにできたと感じています。



実践された先生方は、プロジェクト型学習に対して様々な不安をもちながらのスタートでした。しかし、実践を通して、主体的に学習に取り組む児童生徒の姿や先生方自身の授業改善につながったようです。これから実践される皆さんも、不安を感じられているかもしれませんが、3校の先生方の工夫を参考にして、実践につなげましょう！



目次

- 1 プロジェクト型学習とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 1
- 2 プロジェクト型学習の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 1
- 3 単元計画を立てる
 - ・資質・能力の特定・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 2
 - ・発問の設計・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 4
 - ・評価の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 5
- 4 学習活動の設計及び授業実践
 - ・授業実践（1）尾道特別支援学校しまなみ分校・・・・・・・・ P. 6
 - ・授業実践（2）庄原特別支援学校・・・・・・・・ P. 8
 - ・授業実践（3）広島北特別支援学校・・・・・・・・ P. 10
- 5 授業実践を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 12

1 プロジェクト型学習とは

プロジェクト型学習って、実はあまりよく分かりません。課題発見・解決学習とどう違うのですか？



プロジェクト型学習は、課題解決だけが目的ではなく、児童生徒が解が一つでない発展性のある課題に取り組み、解決し、成果物を作成していくという一連のプロジェクトの体験を通して汎用的能力の育成を目指す学習方法です。



現状の課題

課題発見・解決学習
(課題を解決することが中心)



未来を描く

現状の課題

プロジェクト型学習
(現状の課題と未来のギャップを埋めながら、プロジェクトを遂行していく探究)

「課題発見・解決学習」と「プロジェクト型学習」の違いについて、よりイメージをもていただくために、小学部第6学年における「町おこし」の授業を例として紹介します。



まずは、「課題発見・解決学習」です。授業導入で、「〇〇市の人口減少のグラフ」を見せます。そこで、児童は、人口が減っていることを知ります。次に、「空き家の写真」を見せます。そこで、児童は、〇〇市は空き家が多いという課題を知ります。教師の頭の中には、町おこしの一つとして、「空き家再生」があり、児童に課題を発見させるように導き、解決方法を考えさせます。



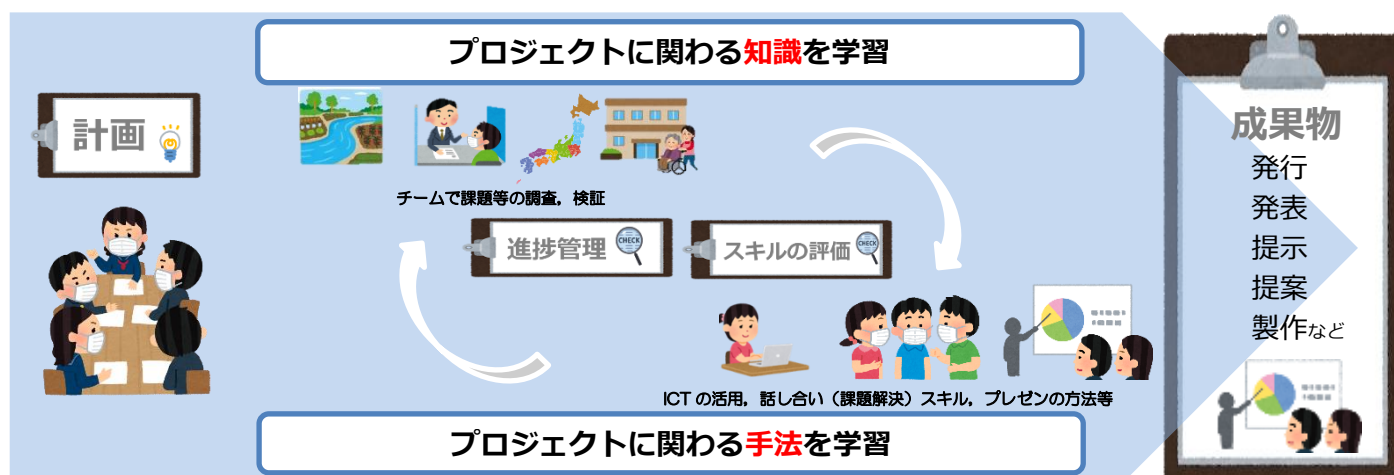
これを、プロジェクト型学習にすると、教師が児童に対して、「10年後の〇〇市をどうしたいか。」を問います。そうすると、児童から、「みんなが楽しく住める街にしたい。」などの回答が返ってくることが考えられます。みんなが楽しく住める街にするための解は一つではありません。例えば、〇〇市でいえば、地域の課題として、坂が多いことや空き家が多いこと、スーパーが少ないことなど、複数の課題があります。すると、解決方法もさまざま考えられます。例えば、坂が多いことであれば、自動走行車やロープウェイの活用があり、空き家が多いことであれば、カフェを運営することなどが解決方法として挙がってくるかもしれません。そして、10年後のみんなが楽しく住める〇〇市について考えて作成した成果物を、例えば、〇〇市役所の職員にプレゼンします。



2 プロジェクト型学習の特徴



児童生徒が自ら発見した課題に主体的に取り組み、身近な問題の解決や、プロジェクトを完成させることを目指す過程で、**知識及び手法を学習**しながら、**チームで協働して取り組んでいき**、**実社会に生かせる成果物の作成**に取り組んでいきます。また、**他の学習にも応用できる**、**汎用的能力の育成**を目指します。



3 単元計画を立てる

三つのポイントの順序で計画を立てていきましょう。



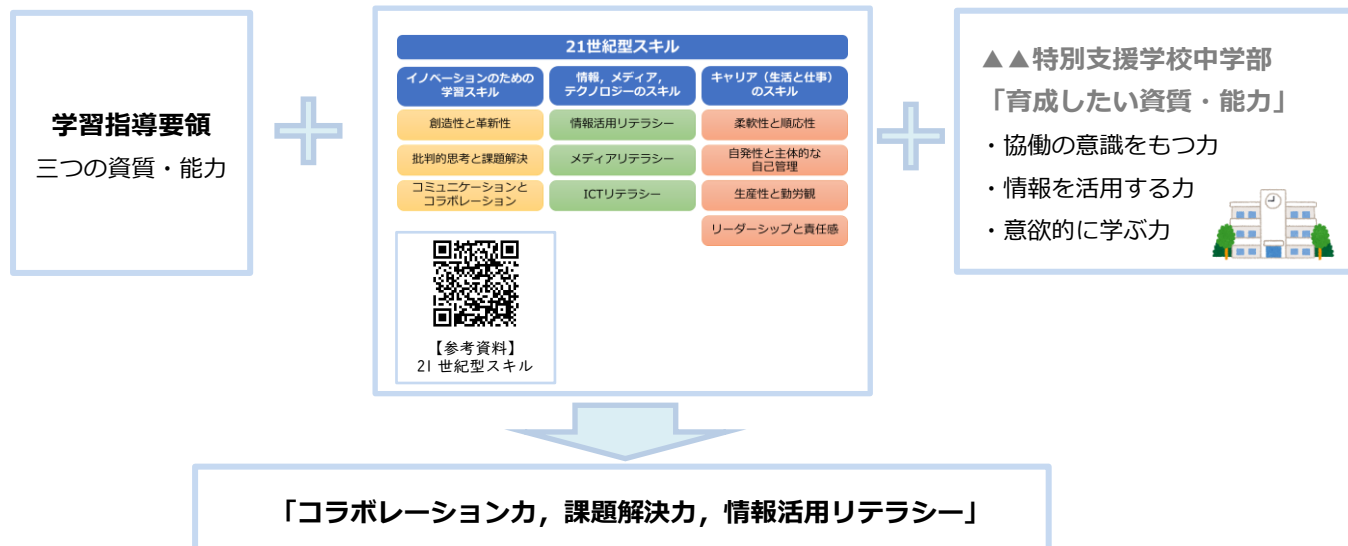
① 資質・能力の特定

どのようなことを考えて資質・能力を決めたらよいですか？



現在の課題を解決することだけでなく、未来のことも考えて単元を設計するため、学習指導要領、21世紀型スキル、所属校の児童生徒に育成したい資質・能力等を合わせて、本単元で育成したい資質・能力を特定します。

たとえば、次のように考えます・・・



これらを踏まえて、実際に授業をされた先生方が、どのようなことを大切に育成したい資質・能力を特定したか聞いてみましょう。

尾道特別支援学校しまなみ分校 小学部の資質・能力の特定

目指す姿

学校教育目標

知的障害のある児童生徒に対して専門性に基づく一貫した教育を、家庭や地域と協働して行い、自律し地域・社会に貢献できる人材を育成する

育てたい児童生徒像

心身をきたえ、仲良く助け合い、進んで学ぶ児童生徒

小学部の目標

- 興味・関心をもって学ぶ児童（確かな学力・生活力）
- 仲良く遊ぶ児童（豊かな心）
- 元気よく運動する児童（健やかな身体）

児童の実態と課題

- ・言語表出が少ない。
- ・特定の人との関わりの中で生活しており、今後、少しずつ他者との関わりを広げさせていきたい。

他者と関わることで、自分の生活にプラスになることを実感してほしいです。

それぞれの児童に合った方法で他者と関わる力を育成したいです。



今後、自分の生活を広げたり、考えを深めたりするためには、他者との関わり方及び他者の考えを自分の考えに生かそうとする力の育成を図る必要があると考えました。

資質・能力の特定

- コミュニケーション力
- 創造性

これらの資質・能力を育成するために

生活科に示されている「生活に関わる見方・考え方」等を働かせて、学習することができる「遊びの指導」で実践しよう！



また、相手意識をもって取り組むために

「他者と関わって遊ぶ楽しさを知ること」を学習テーマにして、「自分が楽しいと思う遊びに人を誘う」というプロジェクトでやってみよう！



庄原特別支援学校中学部の 資質・能力の特定



教職員全員で検討した「育てたい児童生徒像」及び生徒の実態と課題を踏まえ、これらの資質・能力を育成したいと考えました。

目指す姿

学校教育目標

自立と社会参加、社会貢献に主体的に挑戦する児童生徒の育成
(日本一の特別支援学校を目指して)

育てたい児童生徒像

- あいさつができる子(礼儀)
- ありがとうの心を持つ子(感謝)
- 何事にもチャレンジする子(挑戦)
- 最後まであきらめない、投げ出さない、へこたれない子(へこたれない)

中学部の目標

- 自分から進んで挨拶ができる(礼儀)
- 自分から「ありがとう。」と言える(感謝)
- 大きな目標をもって活動することができる(挑戦)
- 失敗から学び、次につなげることができる(へこたれない)

生徒の実態と課題

- ・教師に対しては一方的に意見を伝えることができる。
- ・生徒同士で協働して活動することに課題がある。

将来、県北の地域社会で活躍できるような力を育てたいと思っています。

単元全体で一つの大きな成果物の作成を考えているので、へこたれず、挑戦してほしいです。

資質・能力の特定

- へこたれない力
- 課題解決力
- 情報活用リテラシー
- コラボレーション力

これらの資質・能力を育成するために

国語科に示されている「言葉による見方・考え方」、総合的な学習の時間に示されている「探究的な見方・考え方」等を働かせて、学習することができる「総合的な学習の時間」で実践しよう！



また、相手意識をもって(専門家として)取り組むために

将来、県北の地域社会で生きていくことを想定し、「住み続けられるまちづくりを」を学習テーマにして、「庄原市の観光地をPRする」というプロジェクトに挑戦しよう！



【専門家とは?】

ここでいう「専門家」とは、課題を自分事として捉え、自らの知識や技能を活かし、責任をもって課題を解決する特別な役割を担っている立場のことです。

広島北特別支援学校高等部の 資質・能力の特定

目指す姿

学校教育目標

児童生徒一人一人の可能性を伸ばし、自立と社会参加を実現する

育てたい児童生徒像

主体的に学び、人と社会につながる
ことができる児童生徒

高等部の目標

自ら考え、判断、行動し、社会の中で
人と協働することができる

生徒の実態と課題

- ・生徒全員が職場実習等を経験している。
- ・自分から質問したり、目的意識をもって自分から行動したりすることに課題がある。

自分から人とコミュニケーションをとれるようになってほしいです。

情報収集をしたり、収集した情報を上手に活用したりする力を育みたいです。



生徒にとって、「できた」か「できていない」か、自分たちでも判断しやすい『パソコン操作の知識・技能』の習得を軸にして、これらの資質・能力を育成したいと考えました。

資質・能力の特定

- 情報活用リテラシー
- PC操作の知識・技能
- コミュニケーション力

これらの資質・能力を育成するために

情報科に示されている「情報に関する科学的な見方・考え方」、職業科に示されている「職業に係る見方・考え方」等を働かせて、学習することができる「作業学習」で実践しよう！



また、相手意識をもって(専門家として)取り組むために

生徒にとって身近な存在である「中学生」を学習テーマにして、「入学を検討している中学生に向けて、本校高等部のよさを伝える」というプロジェクトを生徒に提案しよう！



学校教育目標が、学習指導要領で示す三つの資質・能力に対応していたら、特定しやすいですね。



② 発問の設計

カリキュラム構成質問を考える



カリキュラム構成質問って、何ですか？
どのように質問を設計したらよいですか？

資質・能力の育成のための質問の在り方を
「カリキュラム構成質問」と呼んでいます。
次の三つの異なるカテゴリーがあります。



一つの明確な答えがあるわけではなく、生涯において何度も問い直され、その答えが更新され続けるような問い

本質的質問 (本質的な問い)

【幅広く深い思考を促す】
・複数の教科、単元を包括する質問
・一つの明確な答えはない

「本質的な問い」に基づいて立てられた、児童生徒が教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせるための問いであり、単元を通して考え深めていく問い

単元質問 (単元を貫く問い)

【単元の学習目標】
・単元を通して考えを深めていく質問
・一つの明確な答えはなく、経験や考えから導いていく

「単元を貫く問い」を解決していくために必要となる、単元を構成する授業内で身に付ける知識・技能等につながる問い

内容質問 (個別の問い)

【単元の中で理解・習得する知識・技能、情報】
・具体的な学習・探究活動に結びつく質問
・明確な答えが存在する

尾道特別支援学校しまなみ分校の カリキュラム構成質問の設定

本質的質問

(将来自分たちで) 楽しい場をつくるためには、どのようなことが必要だろうか



将来、自分の思いを伝えたり、他者の思いを受容したりしながら協働していく力の育成を図りたいと考えたとき、「楽しさ」がキーワードになると思い、この質問を設定しました。

単元質問

周りの人と関わることで、どのような楽しさが生まれるだろうか



遊びを通して、他者と関わることのよさに気付いていけると思い、この質問を設定しました。

内容質問

自分の楽しい遊びは何だろう

など



まずは、児童自身が楽しいと感じる遊びを見付けることが必要であるため、最初の内容質問を「自分の楽しい遊びは何だろう」としました。

庄原特別支援学校のカリキュラム構成質問の設定

本質的質問

10年後、私たちはどのように県北の地域に関わっていくか



「この学習をする目的って何だろう？」と、繰り返し考え、今現在、目に見えている課題だけではなく、10年後、生徒が社会に出た後のことも意識して考えました。

単元質問

庄原にたくさんの人に来てもらうためには、どうしたら良いだろうか



単元のすべての学習活動とつながる質問を設定しました。単元を学ぶ意義を常に意識してほしいと思ったからです。

内容質問

庄原の観光地は何がありますか
庄原にはどのくらいの人が観光に来ていますか など



単元質問から派生して、一つの授業で考えてほしい内容について質問にしました。また、生徒の興味・関心がある内容について質問しました。

広島北特別支援学校のカリキュラム構成質問の設定

本質的質問

10年後、私たちは周囲の人間に良い影響を与えることができるだろうか



単元質問

学校やこれから入学してくる後輩にできることはないか

「自分が人の役に立っているという実感がもてない。」と感じている生徒にとって、「自分は人の役に立てる。」「自分にはそうできるだけの力がある。」と実感できるような経験をさせることで、将来、社会との関わりをもって生きていけるのではないかと考え、この質問を設定しました。



内容質問

職業コースの様子を伝えるには、どのような方法があるだろうか など



生徒が活動内容を自分たちで探りながら学習を進め、自分たちが主体の学習だということを実感できるように、生徒の思考を導けるような質問をたくさん考えました。

③ 評価の検討

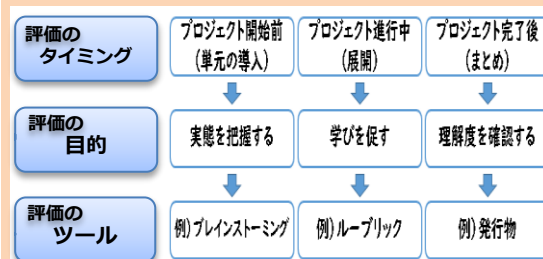
評価を検討する際のポイントは何ですか？



特定した資質・能力について評価規準を設定し、その達成に向けて、どのようなタイミングで、どのような評価をするか検討します。評価は単元終盤に総括的評価を行うだけでなく、単元全体を通して、多様な評価を取り入れ、タイミングよく評価すること（形成的評価）が大切です。評価の一例として、ルーブリックによる評価を紹介します。



【参考資料】
評価のタイミング



ルーブリックによる評価

中学部



本学級の生徒は、生徒同士で協働して活動することに課題があるため、特に育成したい資質・能力を「コラボレーション力」として設定し、評価場面を「話し合い活動」としました。また、生徒実態に幅があるため、ルーブリックは、個々の生徒について作成しました。

○ルーブリックの作成方法（一例）

- ア 児童生徒の実態等を踏まえて、育成したい資質・能力を設定する。
- イ ルーブリックによる評価が評価方法として適している育成したい資質・能力を選択する。
- ウ 評価場面を具体的に設定する。
- エ 選択した育成したい資質・能力に係るルーブリックを作成する。
- ※ 必要に応じて、自己評価に活用するために、児童生徒の理解度に応じたルーブリック（キーワードを強調したり、イラストで示したりするなど）を作成する。

生徒Aの実態及び教師用ルーブリック	
実態	・機械、神楽、地図が好きである。好きなことについては、中心的に活動を進めることができる。 ・自信のある内容については、自ら発言できる。

段階	評価基準
4	積極的にグループのメンバーと意見交換をする。
3	積極的にグループのメンバーに意見を伝える。
2	グループのメンバーに意見を伝える。
1	意思決定に関わらない。

生徒Dの実態及び教師用ルーブリック	
実態	・積極的にコミュニケーションを取ることができる。 ・相手の理解度を意識しながら、伝え方を工夫することができる。

段階	評価基準
4	いつもグループのために行動し、話し合いに積極的に参加して、グループのメンバーをリードする。
3	グループのために行動し、話し合いに参加する。
2	グループのメンバーと協力して、目標達成のために努力する。
1	グループのメンバーと協力して、目標達成のために努力できない。

小学部



小学部も個々の児童に応じてルーブリックを作成しました。このことにより、どのような姿を目指しているのか、今、どの段階に児童がいるのかを教師が把握できました。児童に対しては、実態を考慮し、文章によるルーブリックを提示しませんが、児童は、教師とともに絵等を用いながら今の自分の状態に気付き、次の学びにつなげていくことができるようにしました。

その他の評価ツール

高等部



これまでの発表の場面では、生徒は自分たちの活動を客観的にみることができず自分本位の伝え方になっていました。多様なツールを用いて客観的に評価することで、自分のことを客観的に捉えたり、相手意識をもって伝えたりできるようになってほしいと考えました。

チェックリスト

成果物の作成や発表の仕方について具体的な評価項目を設定し、それに基づいて他者評価できるリストを作成し活用しました。これにより、他者からのアドバイスも素直に受け入れやすくなりました。

自己の映像視聴

自己の発表映像を視聴することで、自分の活動の様子をメタ認知することができるようになりました。

4 学習活動の設計及び授業実践

どのようなことを意識し、学習活動を設計するとよいですか。



実践した先生方がされた工夫とともに授業の実践を紹介します。学習活動を設計する際には、単元計画ルーブリックなどを参考にしてみましょう。



【参考資料】
単元計画ルーブリック



【参考資料】
主体的な自己管理・ルーブリック

授業実践（１） 小学部 第１学年

遊びの指導「『一緒に遊ぼう！』『見て見て！』と伝えてみよう
～いろいろな紙で遊ぶことを通して～」（12 時間）

* 児童実態及び単元設定の理由 *

本学級の児童は、発達段階や言葉によるコミュニケーションの難しさから、学校において、特定の人との関わりの中で生活している。今後、自分の生活を広げたり、考えを深めたりするためには、他者との関わり方及び他者の考えを自分の考えに生かそうとする力を身に付けることが必要と考え、本単元を設定した。

* 単元の概要 *

色々な素材の紙を自由に使って遊ぶことで、自分が楽しいと思う遊びを見付け、そこから遊びを発展させていく過程で、人の誘い方や注意喚起の仕方を学ぶ。また、他者と関わることによって、楽しいことが増える喜びや共有する嬉しさに気付く。



最初は、単元の最後には、「トンネルランド」が完成しているというイメージをもっていました。しかし、カリキュラム構成質問を軸にして学習の流れを考えていく際、「トンネルランド」の完成につなげていくことに難しさを感じました。その難しさは、遊びの規模や内容のイメージを指導者が具体的にもっていたためであると感じ、今回は成果物を「他者とつくった楽しい遊び」と大きなイメージで設定しました。

学習段階	学習活動
導入	○前期に児童が気に入った遊びである頭を開けることができるまの中にいろいろな紙の素材を入れておき、取り出して遊ぶ。 ○紙を破ったり、ちぎったり、積み上げたりして自由に遊ぶ。
展開 1	「自分の楽しい遊びは何だろう。」 「楽しい遊びを見付けて、先生に教えてね。」 ○振り返りで動画から、特に楽しかった場面を選択し、発表する。
展開 2	「楽しい遊びができたなら、先生や友だちに『一緒に遊ぼう』と誘ったり、『見て見て』と呼んだりしてみよう。」 ○一人で扱いにくい大きい素材（段ボール等）や相手がいるとできる遊び（しっぽとり、玉入れなど）を手掛かりに、遊びを発展させる。 ○振り返りの際に、それぞれの楽しかった遊びを共有する。
展開 3	○教師、小学部の児童、家族等、自分の遊びを見てもらいたい人を決定する。 ○「一緒に遊ぼうカード」を作成し、渡して誘う。 ○「一緒に遊ぼう」と誘ったり、「見て見て」と呼んだりして自分の遊びを見もらう。 
まとめ	○自分で誘ったり、「見て見て」と呼んだりしている姿の動画から、人と関わったことで、遊びの楽しさが生まれたか確認をする。

指導上の工夫

○導入の工夫

これまでの遊びの経験から、反応が良かったもの（今回はだるま）を導入に用いることで、児童が紙を使って遊ぶ活動に入りやすくなりました。

○デジタル機器の活用

言葉で思いを表出することが難しいため、振り返りにおいて、学習活動の様子を動画を用い、児童が楽しかった場面を指差すなどして思いを表出できるようにしました。

【①内容質問の理解につなげる工夫】

（詳細は次ページ①）

【②学びをつなげていく工夫】

（詳細は次ページ②）

教師が参観日を意識し、児童の楽しい遊びをより発展させようと促したとき、児童の意欲が半減したと感じました。成果物がゴールではなく、資質・能力を育成することを意識することの重要性を改めて認識しました。



【③他者との関わりを広げる工夫】

（詳細は次ページ③）

実社会とのつながり

これまで主に担任と関わりながら生活している児童にとっては、まずは他の教職員と関わることが実社会とつながる第一歩と考えました。今後、学校全体、そして地域へとつながりが広がっていくことを期待しています。



① 内容質問の理解につながる工夫



児童の実態により、内容質問を口頭で伝えるだけでは理解が難しいと考え、環境づくりなどの工夫をしました。

教師自身も遊びを楽しんでいる様子を自然に見せることも意識しました。また、「楽しい」という気持ちを言葉だけでなく、声の調子や身振りでも伝えるようにしました。

内容質問：「自分の楽しい遊びは何だろう」



お互いの遊びが見える位置



箱に入った牛乳パック

様々な大きさの牛乳パックをあえて出しておく

手に取りやすい題材の位置

ポイント

- ★児童の発言、視線、ジェスチャーの観察
- ★ルーブリックなどによって、どのような児童の姿を目指しているのかを具体化

② 学びをつなげていく工夫



学びが断片的にならないよう、毎時間、前時の想起と本時の振り返りの時間をしっかりとりました。

第4時 本時の振り返り

何が楽しかった？

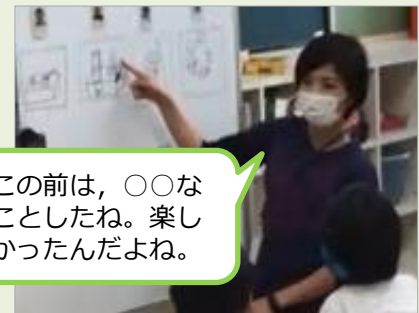


児童：具体物やジェスチャーで伝える。
教師：児童の伝えたいことを絵に表す。

ポイント

- ★児童の考え等を全員が理解できる方法で共有
 - ・自分の学びを自覚
 - ・教師が児童の学びを把握
- ★本時の振り返りで使用したものを次時の最初に示し、児童が前時の活動を想起できるようにする。

第5時 前時の想起



この前は、〇〇なことしたね。楽しかったんだよね。

絵を見て前時の活動を思い出し、本時の楽しい遊びを考える。

本時の振り返りでは、自分の楽しかった遊びをしっかりと表現することができました。



児童は学びのつながりを意識したようでした。「今日は〇〇をしたい」と楽しい遊びの続きをしたり、家で行った遊びをしたりする姿が見られました。

③ 他者との関わりを広げる工夫



児童が遊びを通して関わる他者を身近な人から少しずつ広げました。

一緒に遊ぼう！



児童の活動

「自分の遊び」を十分に作る

「一緒に遊ぼう」「見て見て」と表現する方法を身に付ける

参観日に保護者及び兄弟を誘う

学級担任以外の教師を誘う

ポイント

- ★プロジェクト（自分の楽しい遊びに他者を誘う）開始までの意欲付け
- ★言葉だけでなく、身振り等を含めて、児童に合う誘い方
- ★徐々に関わる他者を広げた成功体験の積み上げ

単元終了後、図画工作科等様々な場面において、「一緒に遊ぼう」「見て見て」と他者に働きかけています。



汎化させることができていますね。



* 生徒の実態及び単元設定の理由 *

本学級の生徒は、生徒同士で協働して活動することに課題がある。将来、県北の地域社会で生活するであろう生徒たちが地域で活躍できることを願い、本単元を設定した。

* 単元の概要 *

観光客が減っているという地域の課題に気づき、他地域から足を運んでもらえるように、庄原の魅力を調べてまとめ、地域活性化のために PR を行う。



これまででは、教師が示した課題に対して、教師が示したとおりの解決方法で、授業を進めていくことが多く、授業のスタイルを変えたいと思っていました。今回の単元では、特に「生徒に学びを委ねること」「生徒同士で協働して一つの成果物を作成すること」を意識して単元開発を行いました。

学習段階	学習活動
導入	「広島県の観光地は、何がありますか。」 ・既習内容や自身の意見を発表する。
展開 1	「庄原の観光地は、何がありますか。どのくらい人が来ていますか。」 ・データの読み取り、他地域との観光客数の比較をする。
展開 2	○「庄原の観光地」について情報や課題を集める。 ・インタビューやアンケート（校内の教職員・児童生徒）の実施・集計
展開 3	○現地調査（2 か所ほど） 例）帝釈峡（雄橋）、熊野神社（千年杉）等 ⇒ 「上野公園」に決定！！ ・魅力の確認。発信するための情報収集。
展開 4	○現地調査の情報をもとに、まとめる。 ・発信するための情報の整理、分析。
展開 5	○まとめた情報を発表・発信する。 ・成果物を作成する。 ・専門家に成果物の発表を行い、助言を受けて情報の再検討をする。 ・庄原観光地アピールとして、まとめた情報を学校 HP 等で発信する。 成果物は、YouTube で公開しています。動画は、右の QR コードから！
まとめ	○活動の振り返り ・庄原の魅力について、整理をする。 ・庄原で生活する一員として、今後も魅力を伝えることを確認する。

指導上の工夫

○自ら課題に気付く

内容質問である「庄原の観光地は、何がありますか。どのくらい人が来ていますか。」については、グラフを使って、他の市町の観光客数と比較しました。

（ここでは、数学的な見方・考え方を働かせることを、教師は意図していました。）そのため、生徒は、「なんで、庄原は少ないんじゃない！」等と自ら課題に気付くことができました。



【①生徒が「カリキュラム構成質問」を意識するための工夫】（詳細は次ページ①）

先生から示された質問を、もっと深く考えたいな。



○デジタル機器の活用

主に校内の教職員に対して、各々の生徒が「庄原の観光地」についてインタビューを行い、インタビュー動画を、学級内で共有しました。また、相手の話を聞き漏らしていた場合に、繰り返し動画を見て、情報を整理することもできました。



【②③話し合い活動の工夫（場の工夫及び自己評価としてループリックによる評価を活用）】

（詳細は次ページ②③）

課題の解決に向けて、みんなで話し合いを進めるぞ。



○役割分担

生徒の興味・関心に応じて、動画編集班とナレーション班に分かれ、各班が連携しながら、作業を進めました。どちらも役割分担して取り組むことは初めてでしたが、意欲的に取り組むことができました。



動画編集班



ナレーション班

① 生徒が「カリキュラム構成質問」を意識するための工夫

授業では、カリキュラム構成質問の中でも、「単元質問」「内容質問」を意識して指導しました。



ポイント

- ★単元質問
 - ・毎時間、授業の冒頭に、単元質問を示す。一つの授業と単元を、関連付ける。
- ★内容質問
 - ・電子黒板で内容質問を示し、いつでも確認できるようにする。



内容質問を電子黒板に提示する様子

「単元質問」については、生徒自ら、「庄原にたくさんの人に来てもらうためには、どうしたら良いだろうか。」の言葉を授業中に発することもありました。「内容質問」についても、毎時間、繰り返し質問することで、生徒が「今日はどんな質問について考えるの。」等の様子がみられました。

② 話し合い活動の工夫（場の工夫）



今まで、学級内で話し合い活動をあまり設定していませんでした。話し合いを活発にするためには、まず場の工夫が必要だと思いました。

また、話し合いの経験が少ないこともあり、経験を増やすことも大切であると考えました。そのため、「現地調査したい場所」「成果物の公開方法」「成果物に掲載したい事柄」等、さまざまな内容について、話し合いをしました。

ポイント

話し合いの経験が少ない生徒に対して、支援具を提示するのみでは、活用のイメージが掴みにくい。そのため、教師が支援具を使ってモデルを示す。このことにより、支援具を効果的に活用する姿がみられた。

グループワークのルール

- ① はっぴょうはひとりずつ。
- ② きくときは てきをとめる。
- ③ きくときは ヘソを かける。



まずは、話し合いを行う際の、ルールを伝えました。ルールに示した内容は、基本的なことですが、この基本的なことが定着した頃から、話し合いがスムーズに進むようになりました。



当初は、話型が手元にあっても、司会が滞ることがありました。しかし、繰り返し取り組むことで、少しずつ自信が生まれ、単元後半では、教師のフォローがほぼ必要なくなりました。



司会用の話型を見ながら
司会を務める生徒

③ 話し合い活動の工夫（自己評価としてルーブリックを活用）

場の工夫により、話し合いが生徒主体に進み始めたので、話し合いの質をより高めるために、自己評価としてルーブリックを活用することとしました。



ポイント

- ・P.5のルーブリックを基に、生徒用のルーブリックを作成する。その際、個の実態に応じて、文言の一部を変更したり、イラストを活用したりする。
- ・話し合いの前に、生徒用のルーブリックを確認する場面を設定する。また、話し合いの後には、個別に振り返る場面を設定する。

話し合いの前に、一人一人が自分のルーブリックを確認することで、ルーブリックに記載された内容を意識して参加している様子がみられました。また、話し合い後の振り返りでは、本時の評価のみならず、教師と一緒に、次回の授業で意識する内容を確認している生徒もいました。

ふりかえりシート			
ふりかえりシート		ふりかえりシート	
4	3	2	1
話し合いでは、リーダーとして友だちの意見に「いいね。」と褒めながら進めることができる。	話し合いでは、友だちの意見に「いいね。」と褒めながら進めることができる。	話し合いでは、友だちの意見に「いいね。」と褒めながら進めることができる。	話し合いでは、友だちの意見に「いいね。」と褒めながら進めることができる。

生徒用
ルーブリック
(生徒D)

実社会とのつながり

今までも、地域について学習することがありましたが、今回の学習は、生徒がより主体となり、地域を変えることまでを意識した学習になりました。また、生徒は、情報発信の手段として、インターネットが有効であることに気付き、学校を基点に、インターネットを介して、実社会と繋がったことは、今後の学び方や生き方によい影響を与えてくれると思います。

＊生徒の実態及び単元設定の理由＊

生徒は、目的意識をもって自発的に行動することに課題がある。就業後、主体的に業務に取り組める人になってほしいと考えている。どのような職業に就いても、コミュニケーション力、情報収集・活用能力が求められる。PC操作の知識・技能習得を軸として、これらの資質・能力の育成を図りたいと考え、本単元を設定した。

＊単元の概要＊

生徒は、学校から「入学を検討している中学校（中学部）の生徒に対して学校紹介を任せたい。」という依頼を受け、「学校を紹介し、新入生の不安を和らげよう」というプロジェクトを遂行する。どのように紹介すれば本校高等部のよさが伝わるか試行錯誤する中で、より伝わりやすい内容や表現方法を考える。



単元全体を通して、チームでの話し合いを充実させることを大切にしました。単に「話し合いなさい。」と投げかけるのではなく、「何について」、「どのようなことを目指して」、「今、自分たちがどのような状態か」などを明確にすることで、プロジェクトの成功に向けて意味のある話し合いができるようになってほしいと考えました。

学習段階	学習活動
導入	「中学校（中学部）の生徒が、学校訪問に来たときの、学校紹介を依頼されました。」 どのように紹介するとよいと思いますか。」 「職業コースの様子を伝えるには、どのような方法があるだろうか。」 ○グループで意見交換する。
展開Ⅰ	「どのように紹介すれば、後輩に安心して入学してもらうことができるだろうか。」 ○学校紹介の資料を作成する。 ・情報収集・意見交換を行う。
展開Ⅱ	「どうすれば、相手に分かりやすく伝えることができるだろうか。」 ○見本 PP との比較 ○毎時間の振り返り（課題の確認） ○評価表を使って、どうしたらよいかを考える。 ・ルーブリック ・チェックリスト（文字の大きさ、色、アニメーション効果、画像の観点でチェック）の活用 ○自己の映像視聴
展開Ⅲ	○広北まつりでの「学校紹介」の発表に向けて、資料と発表の仕方の最終調整をする。
まとめ	○広北まつりでの発表を映像で振り返り、チェックリストを基にグループで意見交換し、次への課題を考える。

指導上の工夫

【①生徒の意欲を引き出す導入の工夫】

（詳細は次ページ①）

皆には、しっかり力がついているよ。
だから、信頼して任せよう。



【②主体的な学びに導く工夫】

（詳細は次ページ②）

前期で学習した PP を活用して発表しよう！



中学生が何を知りたいと思っているのか、アンケートをとろう！

○見本 PP との比較

既習事項であるプレゼンテーション検定の資料を見本にして、作成のポイントを確認するとともに、自己の資料と比較検討できるようにしました。

【③よりよい発表にする工夫】

（詳細は次ページ③）

- ・視点を与えることで、課題や目的等が明確になり、活動する生徒にとっても、見守る教師にとっても、「何のために」「どのようになれば」を意識して学習を進めることができました。
- ・多様な評価を用いることで、自分のことを客観的に見るができるように工夫しました。

【④他者意識をもって発表する場面】

（詳細は次ページ④）

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中学生に直接、学校紹介の発表ができず、発表会の動画を中学生に見てもらうことになりました。



これに対し生徒が次のように発案

発表の中に、中学生の不安や質問に答えるコーナーをつくろう！



実社会とのつながり

本単元では、生徒と中学生とのつながりを実社会とのつながりとししました。コロナ禍で中学生と対面で関わることはできませんでしたが、アンケートをとって中学生の思いを知ろうとしたり、中学生の不安等に対する回答コーナーを設けたりして、生徒自ら「（実社会と）つながる」ことの大切さに気付くことができました。

① 生徒の意欲を引き出す導入の工夫



- *ポイント*
- ★自己肯定感の低い生徒に自信をもたせ、生徒の意欲を引き出す。
- ・就業体験や職場実習などを振り返り、できるようになったことや褒めてもらったことなどを自覚できるようにする。
 - ・就業体験等を立派にやり遂げたことで、力が付いていることを周知から認められ、重要なプロジェクトを任されたと感じられるように課題を提示する。

先生は、僕たちのことを信頼して任せてくれている！



不安もあるけど任されるって嬉しいな。



「どのような活動をどのように進めていけばよいか」という生徒の不安を軽減するため、生徒の成長を認める言葉かけをしました。



② 主体的な学びに導く工夫

- *ポイント*
- ★教師が「教える」から、教師は「見守る」に意識を変える。
- ・活動の目的は教師が伝え、活動内容は生徒が自己決定できるようにする。
 - ・生徒だけでは進行や解決が困難な場面では、教師が質問を重ねながら生徒の主体的な活動をサポートする。
 - ・可能な限り教師は介入せず、見守る。



どのような方法で学校紹介をすると、高等部の魅力を中学生に伝えられると思いますか？

これまで学習したことで、どのような方法だと「よりよく伝わる」のでしょうか？

【既習事項】



生徒が問いを立て主体的に活動

中学生は何を知りたいのかな？



アンケートをとろう！

既習事項を汎化し活動を自己決定

PPが分かりやすかった。



PPを作成して発表しよう！

③ よりよい発表にする工夫

- *ポイント*
- ★「今の自分」と「目標とする姿」を明確にする
- ・毎時間の振り返りと課題の確認により、自己の課題と活動の目的を自覚できるようにする。
 - ・ループリックにより、レベル別の目指す姿を生徒が具体的にイメージできるようにする。
 - ・チェックリストにより、他者評価の観点を具体的に示し、課題が明確になるようにする。
 - ・自己の発表映像の視聴により、自分の姿をメタ認知できるようにする。

ループリックにより、目指す姿を明確にし、自己の映像視聴によるメタ認知、チェックリストによる具体的なアドバイスで、他者からのアドバイスを素直に聞き入れ、改善に向けて建設的な話し合いができるよう工夫しました。

チームリーダーの育成にも力を入れました。リーダーへ「なぜ、それが課題だと思うの？」「どのようにしたくて、この活動をするの？」など、丁寧に指導し、リーダーが中心になって活動を進められるようにしました。



④ 他者意識をもって発表する場面

中学生へのアンケート結果から・・・

高等部に入学して友だちができるか不安です。



中学生

中学生が安心できるよう、不安や質問に答えるコーナーを入れて発表しよう！



広北まつりでの発表の様子



広北まつりの前は、よりよい発表のために休憩時間や放課後の時間を使って、自発的に活動していました。



5 授業実践を終えて

児童生徒の変容

単元の実施前後で、児童生徒にどのような変容が見られましたか。



尾道特別支援学校 しまなみ分校

これまでの遊びの指導では、児童は「今日は何をするの?」と尋ねていましたが、今回の単元では「今日は〇〇をやりたい。」と伝えていました。また、他の場面でも担任以外の教師と関わろうとする姿が見られています。プロジェクト型学習を通して、言葉等によって自分の思いを伝えたり、他者と関わったりすることで、自分の生活が充実することに気付いたのだと感じました。



コミュニケーション力
UP!!

庄原特別支援学校

本実践を通して、生徒同士で協働して成果物を作成する成功経験を積めたことで、本実践以降でも、例えば、教師が話し合い活動をするのを促さなくても、「〇〇さん、どう思うの?」のように、生徒同士で話し合い活動をするできるようになりました。このこと以外にも、本実践での学んだ様々なことが、他の場面でもみられるようになっていきます。



汎化する力
UP!!

広島北特別支援学校

これまでは、教師が「〇〇についてはどう思う?」など、質問を重ねなければ、生徒だけで活発に話し合うことが難しかったのですが、リーダーへの丁寧な指導と、多様な評価を活用して話し合いを重ねることで、単元後半には、生徒だけで活発に話し合いができるようになりました。また、広北まつりに向けて休憩時間等にも資料を改善したり、発表練習をしたりして、主体的に学習することができたと感じています。



主体性
UP!!

教師の変容

実践してみて、教師にも変容はありましたか?



ルーブリックを作成することで、学習の見通しや到達度等について、**T2の教師と明確にイメージを共有**することができました。

児童生徒に「**学びを委ねる**」という意識を高めることができました。単元のテーマに向かって、児童生徒に伴走しながら、教師も探究を楽しみながら学習を進めることができました。

「問い」や「ルーブリック」など、他の各教科等でも活用できる指導方法等を修得し、**指導の幅が広がりました**。
本単元以降の学習場面の指導・支援に生かしています。



3校の実践から、知的障害特別支援学校においてプロジェクト型学習を進めていくことで、児童生徒が主体的・対話的で深い学びをしながら、資質・能力を身に付けていくことができると分かりました。このことは、教師がプロジェクト型学習を理解し、児童生徒が主体となって学習を進めていくことができるよう児童生徒の実態に応じた指導の工夫をしたことで、児童生徒の主体的な学びの姿につながったと考えます。
本実践事例集を参考にしながら、プロジェクト型学習を授業改善の一つとして取り入れ、児童生徒の資質・能力の育成につなげていただければ幸いです。

令和３年度 広島県立教育センター 研究事業
知的障害特別支援学校におけるプロジェクト型学習に関する研究（２年次）

研究指導者 神戸親和女子大学 准教授 武富博文
共同研究者 広島県教育委員会 特別支援教育課 特別支援教育指導係
指導主事 濱崎奈緒
研究協力者 尾道特別支援学校しまなみ分校 教諭 大井有希
庄原特別支援学校 教諭 寄能智貴
広島北特別支援学校 教諭 久山由弥子
研究者 広島県立教育センター 特別支援教育・教育相談部
指導主事 松本和裕，廣藤香織，主査 鈴木優佳

本実践事例集は、本研究の１年次の成果物ある「授業改善！知的障害特別支援学校～プロジェクト型学習の進め方～」を基に、各校で実践した内容をまとめたものです。

なお、１年次の成果物及び本実践事例集は、次に記す株式会社キャリアリンクが実施した研修の内容と資料に準拠し作成しました。



「令和２年度 ICTを活用したプロジェクト型学習の実践に向けて」

実施事業者：株式会社キャリアリンク

当該研修は、Intel®Teach Elements プロジェクト型アプローチをベースとして構成されています。

（発行元・本研究に関する問い合わせ先）
広島県立教育センター 特別支援教育・教育相談部

TEL (082) 428-1188